

育児子屋NEWS

2022. 12. 1

(お子さんが大人になったとき、社会で活躍できるヒントがいっぱい)

「褒める」と「叱る」、 子どもの為になるのはどっち??



最近は様々な「育児書」や「指導本」が販売されています。

ある本では子供に甘い親（もしくは友だち親子）を戒めるかのように「厳しくしなさい」と書いてあったり、また別の本では「褒めて育てる」と書いてあります。

子育ての方向性が間違っていないか心配だから本を読んでいるのに、本によっては正反対のことが書いてありむしろ悩んでしまう・・・という方も多いのではないのでしょうか。

子育てに詳しい心理学博士、榎本博明氏は、

「模範的な子育てをしようなどと思う必要は全くないのであって自分流で良い。子育ては毎日が試行錯誤だ。気持ちが子供にちゃんと向いていれば、どんな対応であっても、時に感情的に叱ってしまい気まずいことになっても、すぐに修復できるし、気持ちは通じるものである」

と、仰っています。ご安心下さい、子育てには正解も不正解もないのです。

基本的には子育てに正解・不正解はないとしながらも、榎本氏は「褒めると子供はダメになる」という本を書かれています。

榎本氏曰く、何でもかんでも褒める子育てをしてしまうと、

「傷つきやすい」「頑張れない」「意志が弱い」

子になってしまうのだそうです。どういうことなのでしょう??

自分勝手な自己主張をするように

榎本氏は大学で講義もされていますが、年々おかしな生徒が増えてきているとのこと。

授業中あまりに態度が悪い生徒がいたので「静かにするように」と注意をすると「うるさいなあ」

と態度を改めない、それに対し説教口調で厳しく注意したところ、その生徒は休み時間に教務課へ駆け込み、「先生からきついことを言われて傷ついた。あんな先生の授業は受けたくないから先生を変えて欲しい」と要求したそうです。

それからどうなったのか？その学生を別の先生のクラスに移すという措置を取り一件落ち着いたのです。お客様扱いが浸透している今の教育業界を物語っています・・・。

別の生徒は何度注意されても授業中に居眠りを繰り返し、挙げ句の果てに「僕は遅くまでバイトをしていて眠たいのです。寝かせて下さい。」と仰いだし、「寝るのなら教室から出て寝なさい」と榎本氏が言うと「僕は友だちと居たいのです。授業料を払っているのだからここにいる権利があります」と言い出したらしいのです。

毎回遅刻する生徒に注意をすれば「僕は家が遠いのです。これでも早く起きて頑張って通っているのです」と、当然自分の言い分が通ると言った調子で話すそうです。

以前、宿題をしてこなかった子がいたので理由を聞くと「時間がなかった」と言います。前の通塾日からは土日でもはさんと数日間あったので「十分時間はあったでしょ？」と聞くと、「土曜日は親戚で集まって、日曜日は家族で遊びに行ったから・・・」と宿題ができなかった理由はちゃんとありますよ！と真剣な顔で答えます。「いや、そりゃ通用しないよ・・・(^;)」と本人にはちゃんと話をしましたが・・・(笑)

榎本氏は著書で以下のように書かれていました。

「義務を果たさなくても叱られない。いつも親がほめるべき点を探してほめてくれ、良い気分にしてもらえる。そんな子育ての結果、どのような人間が作られていくのかということについて、ちょっと真剣に考えてみる必要があるだろう。」

身勝手は社会人になっても変わらない

先日、一般企業に勤める知り合いが嘆いていました。新入社員が入ってきたので同行営業で仕事を教えていたら、

「僕、教えられるの嫌なんですよね。

もっと自由に仕事がしたいです。この会社は僕に合わないから辞めます」

と言い、1週間ほどで辞めてしまったらしいのです。

しかし、このような若者は決して珍しくはありません。

私の同級生で社会労務士をしている友人がいるのですが、

「4月に大量の新入社員の入社手続きをするが、5月頃にすぐ退社の手続きをすることが最近急激に増えた。理由を聞くと教えられるのが嫌、会社が自分に合わないという理由がほとんど。」

と言っていました。この話には私も驚きましたが、とはいえそのようなケースは少数では？と聞くと、どうやらそうでもないらしいのです。

学生時代には成績優秀だったとしても、これでは何のために勉強してきたのか分かりません。何としても、可愛い我が子にはこんな社会人には育てて欲しくないものです。

なぜ「褒めて育てる」が流行したのか

「日本の子供や若者は自己肯定感が低いから、もっと褒めて自信をつけさせないといけない。褒めて育てることで自己肯定感を高めることが必要だ」という考えから、25年ほど前から教育現場でも推奨されるようになり、それが親の間にも広まっていき、叱らなくても良い子育てなんて素敵！と大流行しました。

その結果、果たして若い世代はたくましくなったのでしょうか？

むしろ傷つきやすく、キレやすい若者や、すぐ落ち込む若者が増えているのでは？実際、「無理をしない」「頑張れない」「自分は意思が弱い（できない）と開き直る」子が増えた気がします。（大学でもそうだと榎本氏は著書に書かれています）

企業の管理職や人事関係者、経営者の中で「最近の若者は扱いが難しい」と口にする人は非常に増えています。

2012年に行われた調査（20代から50代の男女350人ずつ計700人に実施）では、その傾向が顕著にみられます。

部下に注意やアドバイスをすると、自分を否定されたかのように感情的な反発を示すため、どうにも指導がしにくい。おとなしい社員の場合は反発しない代わりにひどく落ち込み、やる気をなくしたり休んでしまうため厳しいことが言えず、腫れ物に触るような感じになる。上司に叱られたのがショックで、上司から呼ばれるたびに心臓がバクバクするほど緊張し、ついには出勤できなくなるといったケースもあった・・・etc。

調査データでは、「年長者からアドバイスされて、うっとうしいと思うことがある」という項目では2割を超えており、20代では3割近くがそう答えていたそうです。

「他人に批判されると、それが当たっていてもいなくても無性に腹が立つ」という項目は45%と一番高かったのですが、そこには自信がないのに虚勢を張っていて、それを見透かされたくないという不安が見え隠れします。

どのような褒め方がいいの？(ここ大切です！)

「ほめると子供はダメになる」とは言いますが、当然のことながら全く褒めるなという意味ではありません。何でもかんでも褒めるという風潮がいけない、ということなのです。

先述で「褒めると自己肯定感が高まる」という予測で、褒めて育てる方法が大流行したと書きましたが、褒める＝自己肯定感が高まる、とは言い切れません。

自己肯定感は自分の立てた目標を達成した達成感や満足感から、内（自分自身）から生まれる感覚であって、外から褒められたりして生まれる感覚ではないのです。

実は褒め方によって子供達の心理に大きな差が生じます。あなたはお子さんを褒める際、「結果を褒める」「頑張りや努力を褒める」のどちらですか？

結果を褒める

- ・ 良い結果を褒められると、自分の能力の高さに対する期待を裏切りたくないという思いが生まれ、もし期待を裏切ったらどうしようという不安に駆られます。その結果、確実に成功しそうな優しい問題を選ぶようになり、守りの姿勢に入り困難な問題にチャレンジしにくくなる。

頑張りや努力を褒める

- ・ 努力する人間だという期待を裏切りたくないという思いに駆られ、次ももっと努力している姿を見せたいと、チャレンジしがいのある難しい課題を選ぶようになる。

子供達を指導していても、ほとんどの子は「守りの姿勢タイプ」だと感じます。

そんな時には「塾では通知表つけないのだから、どんどん×してもらって、間違い直しをしたらいい。そうしたら学校の通知表が良くなるよ」と伝えます。

各ご家庭でも、結果よりも頑張りや努力を褒めるようご協力お願いいたします。

あなたはチャレンジできる人ですか？

あなたは物事に挑戦する時、「成功できそうなこと」に取り組めますか？

それとも「チャレンジしがいのある難しいこと」に取り組めますか？

チャレンジしない人に、成長は無し！！

人は物事に取り組むとき、「成功できそうな簡単なことにしか取り組まないタイプ」と「成功するのが難しそうな、チャレンジしがいのあることに取り組むタイプ」に分かれます。

成功できそうな簡単なことにしか取り組まなければ、失敗をすることはありませんが、成長することができません。

難しいことにチャレンジすれば、確かに失敗することもあるかもしれませんが、成長し続けることができます。

あなたはどちらのタイプですか？

失敗することは確かに怖いと思いますが、失敗はマイナスではなく、+0と考えましょう。そしてそれを続けていけば成功の+1へとたどり着けます。その+1の繰り返しで、みなさんの成長へと繋がるのですよ。



「成功は+1、失敗は+0の発想でいこう」

えのもと ひろあき
榎本 博明

しっばい ほんそう
～心理学のエキスパート～

自分の部屋の目立つところに貼って、読み返すようにしましょう。